五輪採用もにらみ、編成に工夫。

7人制ジャパン、新たなアプローチ。 AP

JWC一色に染まったような感じだった6月の日本ラグビー。そんな中でも、ジャパン、セブンズ・ジャパンとも、活動していることを忘れないでいただきたい。今年はフィジーでの集中開催となったパシフィック・ネーションズカップでのジャパンの模様は147㌻からのリポートに詳しいが、セブンズは今年の代表スコッドを発表した後、選抜チームがケニアへ飛んだ。セブンズにとって今年は、五輪の競技種目に加わるか否かが決まる注目の年でもある。その動向に、注目です。

セブンズ日本代表スコッド情報

『国籍主義』見据え、若い才能発掘。大人の世界を知るには絶好の機会。

文▼美土路昭一

今年度の7人制日本代表スコッドが6月12日に発表され、15日には日本選抜が今季初戦となるサファリセブンズ（6月20日、21日）参戦のためにケニアに向けて旅立った。

代表スコッドは、3月に行われたワールドカップ・セブンズのスコッドを中心に、12人の大学生を含む若手も加えた計38人。日本選抜は10人中7人が学生という、さらに若さがなさという、よろしくない事情もあってのセレクションだが、日本選抜は図らずもセブンズが果たせる役割を浮き彫りにした編成になった。

U19とU20で世界選手権に出場している笹倉康誉（関東学院大）にとって、シニアの国際舞台は今回が初めて。「U20でもプロ選手がいてすごいと思ったが、今回はシニアの代表と戦えるのでどんなレベルなのか楽しみ」。日本Aの編成が中止された現状の日本の強化体制では、15人制ではU20と代表の間をつなぐチームはない。サファリセブンズのプールで日本はケニアと同組。2008～'09年のIRBセブンズ・ワールドシリーズで6位、3月のワールドカップ・セブンズでは4強入りした強豪と敵地で戦うことは「大人の世界」を知る格好の機会だろう。

際立つ顔ぶれだ。年内の最大の目標である東アジア大会（12月／香港）がトップリーグと重なってトップリーグ選手の招集が困難になることが予想され、出場資格も「国籍主義」であることは前月のリポートにあった通り。このため、村田監督は12月に招集可能な選手たちに今からセブンズを仕込む」ことにした。

トップリーグの7人制への理解の夏季五輪での実施競技入りを目指している7競技のプレゼンテーションが行われた。追加競技の枠は最大2。日本の大手メディアの報道によると、7人制ラグビーはゴルフと共に有力視されている。

7人制ラグビーの五輪実施競技復活が認められた場合、IRBはワールドカップ・セブンズを廃止して五輪を7人制の最高峰の大会と位置づける方針。そうなればワールドカップ・セブンズにトップアイレイ（ホンダ）らを擁して出場した日本も、東アジア大会同様に日本国籍を持つ選手だけで4年に一度の大舞台に臨まなければならなくなる。

村田監督は「コンパクトなディフェンスなどチームの基本的なスタイルは不変だが、より日本人の特性を活かした戦い方に変わってくると思う」と話す。今シーズンはセブンズジャパンの「日本人らしさ」確立に向けての第一歩でもある。

残して機上の人となった国定が、赤道直下の地での初の国際大会でどんな刺激を受け、何を学ぶか。

関東大学リーグ戦3部校から抜擢されたのは岩井陸男（國學院大）。直前合宿のアタック・ディフェンスでも独走になった正面健司に真後ろから追いつく俊足ぶりを披露した。國學院久我山高時代にU19候補になったものの、リーグ戦1部校の受験に失敗して國學院大に進学した後は、「代表とかまったく無縁のラグビーをしていた」という存在。まだ磨かれていないだけに、村田監督も「これから光る原石かもしれない」と話す。

海外渡航自体が初めてという選手もいるチームを率いる主将の簑城昌拓（コカ・コーラウエスト）は「セブンズを全く分かっていないし、怖いですね」と苦笑いしながら、「何も恐れずにチャレンジし、失敗から学んで欲しい」と頼もしい言葉。自ら「今回は野外教育の引率教諭」と語す村田監督も「ケニアに行くだけでも良い経験。試合では自由にプレーして何かを見つけて欲しい」と期待する。

日本選抜出発と時を同じくして、スイス・ローザンヌで6月15日に開かれた国際オリンピック委員会理事会では、'16年

2009年度　7人制日本代表スコッド

	名前	所属	年齢	出身校	身長	体重
●	国定　周央	明大1年	18	常翔啓光学園	176	73
○	桑水流裕策	コカ・コーラウエストレッドスパークス	23	福大	188	90
	レブハ・テトゥイラ	大東大4年	24	トンガ高	187	102
	アリシ・トゥプアイレイ	ホンダヒート	28	リンウッド高	187	121
	松下　馨	ヤマハ発動機	25	日大	185	88
	佐藤　貴志	ヤマハ発動機ジュビロ	27	同大	176	87
○	成田　秀悦	サントリーサンゴリアス	24	法大	169	68
	徐　吉鎬	ヤマハ発動機	24	朝鮮大	180	96
	マイケル・リーチ	東海大3年	20	札幌山の手	188	95
●	簑﨑　昌拓	コカ・コーラウエストレッドスパークス	25	福大	176	92
	山本　秀文	NECグリーンロケッツ	24	法大	185	86
	末松　勇喜	ホンダヒート	23	國學院大	182	86
●	伊藤　真	青学大4年	21	青山学院	180	83
●	豊前　貴士	日体大4年	22	高崎商	177	80
●	夏井　大輔	関東学大3年	20	秋田工	188	88
●	笹倉　康誉	関東学大3年	20	向上	185	90
●	山根　有人	法大4年	21	札幌山の手	189	94
●	岩井　陸雄	國學院大3年	21	國學院久我山	181	85
●	正面　健司	日本協会	26	同大	175	82
●	フォラウ愛世	豊田自動織機	28	埼工大	189	108
	長友　泰憲	サントリーサンゴリアス	24	中大	177	85
	ファマイ・アテウバ	大東大3年	21	トンガ高	186	100
	友井川　拓	NTTコミュニケーションズシャイニングアークス	23	法大	167	68
○	イロケベヘア・ポセリア	埼工大2年	20	正智深谷	192	113
	長野　直樹	関西学大3年	20	関西学院	174	78
	沼尻　大輝	帝京大4年	21	熊谷工	177	80
	荒牧　佑輔	関東学大3年		小倉	177	73
	宇薄　岳夫	東芝ブレイブルーパス	23	同大	180	85
	権丈　太郎	NECグリーンロケッツ	23	早大	184	98
	小林　訓也	ヤマハ発動機ジュビロ	24	日体大	185	104
	梅山　伸一	リコーブラックラムズ	23	拓大	180	80
	堀山　健一	リコーブラックラムズ	23	拓大	180	78
	山田　章仁	ホンダヒート	23	慶大	180	82
	正海　智大	同大2年	19	東福岡	186	80
	和田　拳二	トヨタ自動車ヴェルブリッツ	23	法大	173	78
	鈴木　学	東芝ブレイブルーパス	26	流経大	199	103
	鈴木　貴士	クボタスピアーズ	28	中大	165	69
	ピエイ・マフィレオ	日大4年	23	トゥポ高	184	91
△	布巻　峻介	東福岡2年	17	志免中	180	86
○△	遠藤　広太	埼工大4年		三本木農	173	86
○△	メフィポセチ・バエア	埼工大3年		正智深谷	176	103

●=7人制日本選抜ケニア遠征メンバー　○=直前合宿参加メンバー　△=練習生

【スタッフ】

監督	村田 亙	ヤマハ発動機	
コーチ	沼沢 健輔	日本協会	
トレーナー	古舘 昌宏	帆ノニアート	
ドクター	岡山 明洋	兵庫医科大学篠山病院	

REVIEW◎アジア五カ国対抗

ジャパン、シンガポール下し全勝で終える。

HSBC asian 5 nations

アジア五カ国対抗	日本	カザフスタン	韓国	香港	シンガポール	勝	負	勝点
日本		○87－10	○80－9	○59－6	○45－15	4	0	24
カザフスタン	●10－87		○30－27	○25－6	○22－19	3	1	15
韓国	●9－80	●27－30		○36－34	○65－0	2	2	8
香港	●6－59	●6－25	●34－36		○64－6	1	3	3
シンガポール	●15－45	●19－22	●0－65	●6－64		0	4	1

パシフィック・ネーションズカップ 日本代表メンバー

ポジション	名前	所属	年齢	出身校	身長	体重	キャプ
PR	平島　久照	神戸製鋼コベルコスティーラーズ	26	福大	180	115	5
	扇山　健介	サントリーサンゴリアス	23	早大	178	122	5
	山下　裕史	神戸製鋼コベルコスティーラーズ	23	京産大	183	125	5
	仲村　慎祐	日大4年	21	報徳学園	190	129	2
HO	青木　佑輔	サントリーサンゴリアス	25	早大	176	96	15
	安江　祥元	神戸製鋼コベルコスティーラーズ	24	帝京大	175	110	2
	金井　健福	サントリーサンゴリアス	24	慶大	175	110	3
LO	大野　均	東芝ブレイブルーパス	31	日大	192	105	33
	北川　俊澄	トヨタ自動車ヴェルブリッツ	28	関東学大	195	105	20
	ルーク・トンプソン	近鉄ライナーズ	28	リンカーン大	196	110	16
	北川　勇次	三洋電機ワイルドナイツ	22	関東学大	195	114	4
FL/NO8	C菊谷　崇	トヨタ自動車ヴェルブリッツ	29	大体大	187	100	23
	佐々木隆道 1)	サントリーサンゴリアス	25	早大	184	98	6
	中山　義孝	トヨタ自動車ヴェルブリッツ	26	同大	184	110	9
	マイケル・リーチ	東海大3年	20	札幌山の手	189	99	6
	タウファ統悦	近鉄ライナーズ	28	日大	183	105	4
	豊田　将万	コカ・コーラウエストレッドスパークス	23	早大	189	105	2
SH	吉田　朋生	東芝ブレイブルーパス	27	東海大	171	78	17
	田中　史朗	三洋電機ワイルドナイツ	24	京産大	166	72	12
	矢富　勇毅	ヤマハ発動機ジュビロ	24	早大	176	83	11
SO	ショーン・ウェア	コカ・コーラウエストレッドスパークス	27	リンカーン大	180	90	12
	ジェームス・アレジ	ニュー・ポート・グウェント・ドラゴンズ	29	オークランド大	187	93	11
	大田尾竜彦	ヤマハ発動機ジュビロ	27	早大	180	92	5
CTB	今村　雄太	神戸製鋼コベルコスティーラーズ	24	早大	178	93	24
	平　浩二	サントリーサンゴリアス	26	同大	185	88	14
	ライアン・ニコラス	サントリーサンゴリアス	29	オタゴ大	192	100	12
WTB/FB	小野澤宏時	サントリーサンゴリアス	31	中大	180	84	51
	五郎丸　歩 ※1	ヤマハ発動機ジュビロ	23	早大	185	98	8
	高岡　耕児 ※2	NTTドコモレッドハリケーンズ	29	立命大	178	81	5
	ジャック・タラント	日本協会	29	アレーザー高	193	90	4

C=主将　1) オライリーの右足脛骨骨折により、6月12日に合流、キャップ数は6月18日（サモア戦）終了時点

▶5月23日▶シンガポール

日本45（26－3 19－12）**15シンガポール**
[7T5G] [5PG]

厳しい暑さの中でのアウェーゲーム。

現在、フィジーで行われているPNCに向けた、格好のシミュレーションの場と考えられていたシンガポール戦。直前に降った雨で気温自体は下がったものの、その分、蒸し暑さは倍増。さらに、ぬれたボールと汗でハンドリングが難しい上に、不可解なレフリングも重なった。

「今までで一番難しい環境のゲームだった」

そんなふうに、カーワンHCも認める悪条件となったが、若手中心のジャパンがコントロールを失うことはなかった。

前半は、SO大田尾、FB五郎丸といった、キャップ数ひと桁のBK陣が効果的なキックを繰り出し、トライにつなげるクレバーな戦いぶり。後半も勝負どころで、初先発のPR仲村など若いフロントロー陣がスクラムでプレッシャーをかけ、途中出場のNO8豊田が初トライを記録するなど、若いメンバーの活躍が目立った。

初キャップでいきなり代表初トライを奪い、大物ぶりを披露した豊田は、アタックだけではなく守りの面でもしっかりした読みとタックルで十分アピール。

「20分間という短い時間の中でも、チームに貢献できたことは次につながる」という本人の言葉どおり、PNCスコッドにも残った。

FL菊谷主将はトライ数7－0の快勝にも、「イージーミスが多く、今のままではフィジーでは通用しない」と手厳しかったが、その一方で「いいチームになってきている」という手応えも感じていた。

厳しい環境をチームとして乗り切ったこと、そして多くの若手の成長が見られたということでは、PNCに向けてポジティブになれるアジアでの終焉だった。

（出村謙知）

ラグビークリニック RUGBY CLINIC for PLAYER & COACH 別冊盛夏号 vol.18 7月25日（土）発売予定

クリス・ウィタカー「レンスター」インタビュー

強さの秘密、あちこちに。若手伸び。理論、高まる。

文▼バリー・ロス

伝統のシックス・ネーションズではアイルランドが優勝し、ハイネケンカップはレンスターが制した。その結果だけを見ても伝わってくる、アイルランドの充実。その秘密を知りたいと、探ってみた。

元オーストラリア代表のクリス・ウィタカーは、レンスターが欧州制覇を成し遂げるのに大きく貢献したSHだ。バーバリアンズの一員にも選ばれ、母国の代表、ワラビーズとも戦う機会に恵まれた。ベテランを、バーバーズ戦のために訪れたシドニーで直撃し、内側から見たアイルランド・ラグビーの強さの秘密を語ってもらった。

●

6月6日、バーバリアンズのメンバーとして、母国豪州と対戦したクリス・ウィタカーは、その試合で輝かしいキャリアに幕を下ろした。バーバリアンズに合流する数週間前には、レンスターの一員として、スコットランドのマレーフィールドで行われたハイネケンカップの決勝でレスター・タイガースを19－16で破り、優勝を飾っていた。

「元豪州代表SHでキャップは31、そのうち1試合はキャプテンとしてプレーした。ワラタスの選手として118試合に出場、そのうち107試合がスーパー14だった。レンスターでも59試合に出場。この10月で35歳になるウィタカーは、彼の好きなグラウンドのひとつ、シドニーフットボールスタジアムに集まった家族、友人そして3万9688人のファンの前で最後のプレーを披露した。

シドニーの海沿い、クージーで生まれ、スポーツ好きな3兄弟の次男である。長男ベンは、ファーストグレードのランドウィックでプレーし、現在はクインズランドのハイパフォーマンスマネージャーを務めている。三男のトムもフットボールをやっており、現在は世界トップ8に入るプロサーファーとして活躍中だ。

―これが最後の試合とおっしゃいましたが、来年プレーする可能性はまったくないのでしょうか？

「次のシーズンの初めには35歳になりますし、自分のピークは過ぎたと思っています。レンスターからコーチとしての話をもらっていますし、この話については非常に前向きに考えています。もし他のチームから、コーチをしながら選手もできるというような話があれば考えたいとは思いますが、今のところ、レンスターの話に興味を持っています」

―3月にはアイルランドが6カ国対抗でグランドスラム、そして5月23日にはレンスターがハイネケンカップ優勝、さらにマンスターがマグナーズリーグ優勝と、アイルランドが世界トップとの呼び声もあります。ここ最近のアイルランドは、なぜ成功を収めているのでしょうか。

「もともと世界でもトップクラスの選手を抱えていましたし、テストマッチでもいい結果を残していました。ただ豪州と同様に選手層に難がありました。かつては、レギュラークラスの選手が怪我をして、代わりに選手が入ると、そこには大きなレベルの差があった。でも今は、それがまったくありません。いい例は、マンスターでプレーする21歳のCTBキース・アールズや、レンスターの23歳、SOのジョナサン・ゼクストンでしょう。レンスターの21歳、PRシアン・ヒーリーも将来有望です。今シーズンも、若い選手たちが与えられたチャンスをものにしています。そうした活躍をみせる若い選手が多く出てきたことが、アイルランドのラグビーの強化が成功している要因でしょう。

さらにアイルランドラグビー成功の要因は、その防御にあると思います。6カ国対抗では、防御面で間違いなくナンバーワンのチームでした。元ラグビー・リーグ豪州代表（4キャップ）で現在アイルランド代表の防御コーチ、レス・キスは素晴らしい日本人がプレーしていないといけない。日本の一番の問題点は環境が良すぎることです。たいていの選手は日本で脚光を浴びてから海外に行きますよね。その前に行ったほうがいいように思います」

―学校、企業スポーツの形態を変えるのは難しいと思いますが。

「そうです。ですから、今の形の中でできることを考える。たとえば、大学の試合の前に、それぞれU20のチームを編成して同じように戦う。今回日本で開催されたIWCに出場したU20日本代表の選手たちが数名、東芝の練習に参加させてもらう機会がありました。大学の選手を数名トップリーグにあずけて短期間でも一緒に練習するようなことも、考えていきたいです」

―代表を強くするためにすべてを集約していくには、わかりやすい目標が必要ですね。

「起爆剤として一番いいのはW杯の日本開催だと思います。W杯の成功とは、ジャパンが勝つことです。そのためにやらなければいけないことが出てくる。現場の監督やコーチだけでなく、日本でラグビーに携わっている人全員が世界で勝つために本気になるということが、なにより大事なのだと思います」

―JWCのU20日本代表の戦いぶりを見ていると、得点力がない。日本ラグビーの抱える課題は、どのカテゴリーでも同じですね。

「私も日本代表時代、三監督の下でプレーしましたが、監督が代わるたびにすべてが変わる。日本の強さ、弱さ、どう戦うべきかは、以前からハッキリしている。それを子供から大人までみんながハッキリと認識しなければいけない。たとえば、薫田監督は、日本のディフェンスは『速く、低く』だと言う。ジョン・カーワンも同じことを言っています。これは強味にしていかなくてはいけない。ただし、日本のモールは強いと言われているけれど、オールブラックスにも通用するのかといえば分からない。このあたりをハッキリしなければいけない。私が思うに日本の選手は他国に比べて状況判断力が劣っている。これは、すぐに手をつけるべき問題です。ここ10年、日本の多くのチームが、シークエンスを取り入れた。グラウンドの場所によって予め何をするか決めて戦っています。自分で考える選手を作らなければ世界で勝つのは難しい。この10年で日本ラグビーが進歩したのはフィジカル面。BKでも大きな選手が増えてきた。いいWTBや突破役の選手はどんどん出てきている。しかし、ゲームを作れる選手は少ない。小さい頃からそういうトレーニングをしていないからです。たとえば、『このグレードは判断力重視』というような指針を協会として出していかなくてはいけない」

―高校の大会形式の見直しも必要でしょうね。

「日本の高校はトーナメントが多く、弱いチームは試合数が少なくなる。海外はどのチームも同じだけ試合できるシステムです。日本は負けると試合ができなくなるから勝つことが大事になる。負けても試合ができる形を作らなければ、コーチのアプローチも変わらないでしょう」

―仕事は山積していますね。

「短期的にできることと、長期的にすることを並行していきます。選手やコーチの層を厚くし、2019年に日本にW杯が来たとしたら、その時に本当にベスト8に行けると誰もが感じる状況にしたいですね」

YOSHIOMI HIRAMOTO

U20世界選手権ではジャパンのウォーターボーイも務めた。昨年戻いた7人制日本代表のコーチ（選手兼任）も続けていく

人物往来①2009

10年後に何かをするためには、いま始めなければならない。日本でラグビーに携わっている人全員が、世界で勝つために本気になることが大事。

ハイパフォーマンスマネージャー（HPM）といえば、3年前にIRBから派遣されたニー・フィリップ氏が務めたことがあったが、日本人で、しかも日本代表コーチングスタッフ以外の強化担当者がフルタイムの契約をするのは前例がない。海外でのプレー経験も豊富で語学にも長けた岩渕氏の起用はいかに決められたのか。彼はこれから何をしようとしているのか。率直な考えを聞いた。

―なぜ今回の就任要請を受けたのですか。

「実は昨年、7人制日本代表のコーチになった頃から、日本代表事業部の太田治GMから、フルタイムでやらないか、という話はいただいていました。ただ、その時はセコムラガッツと契約している以上、セコムで結果を出すことが最優先だった。ところが、今年に入ってセコムラガッツが本格強化をしないことが明らかになった。本格的に協会との契約を考えました」

―HPMという肩書きになりましたね。

「今年の初め頃、競技力向上委員会の上野裕一委員長から、私の今後の方向性について質問されました。私は世界でプレーし、世界に勝ちたいという気持ちを常に持っていたのですが、上野さんにも、君のやることは、日本一を目指すことじゃないんじゃないか、と言っていただいた。日本ラグビーの問題点についても話し合いました。HPMというのは世界の各協会でも大変重要視されている仕事です。興味を抱いていました。そして、太田さんと上野さんが話し合ってくれたわけです」

―いま決断したのはなぜですか。

「この件を考え始めてから世界中の関係者と会い、話をしました。10年後に始めたのでは大したことができないことに気付きました。10年後に何かをするためには、いま始めなければいけないと思うのです」

―HPMとは、何ですか。

「代表（ジャパン）を強くするために何が必要かを考え、実行していく仕事です。たとえば、今10歳の子供に10年後、どんなプレーヤーになってほしいか、そのためにどんな練習をすべきか、日本協会として指針を出していかなければいけない。今回、協会に入って分かったのは、各セクションでは、すでにさまざまなことが行われていることです。コーチ委員会が出しているコーチの指針は素晴らしい内容です。普及育成委員会もさまざまなことを実行しています。ただ、そういったことがすべて代表を強くするため、というハッキリとした方向に向かっていなかったということだと思います。私の仕事はジャパンが常に世界のベスト8を狙える力にすることです。そのときどきのチームが頑張った結果ではなく、コンスタントに強くいられる状況を作る。イメージはあるし、ある程度はプランも作っています」

―イングランドやフランスのクラブに所属したときに、参考になるシステムはありましたか。

「海外のシステムはあまり参考になりません。日本には欧米のようなクラブがない。向こうは、18歳くらいから同じチームでずっとプレーできます。ただ、日本の試合数の少なさとか、若くていい選手が高いレベルでできない、といったことは肌で感じました。私は22歳でイギリスに行ったのですが、それでは遅いと感じました。私が幸運だったのは、十代でジャパンに入れてもらったことです。若い年齢から日本のトップ選手とプレーできたことはいい経験だったし、だからこそ世界に目を向けられた。世界のベスト8に行こうと思ったら、プレミアシップ（イングランドのプロクラブリーグ）で5人くらい日本人がプレーしていないといけない。日本の一番の問題点は環境が良すぎることです。たいていの選手は日本で脚光を浴びてから海外に行きますよね。その前に行ったほうがいいように思います」

―学校、企業スポーツの形態を変えるのは難しいと思いますが。

「そうです。ですから、今の形の中でできることを考える。たとえば、大学の試合の前に、それぞれU20のチームを編成して同じように戦う。今回日本で開催されたIWCに出場したU20日本代表の選手たちが数名、東芝の練習に参加させてもらう機会がありました。大学の選手を数名トップリーグにあずけて短期間でも一緒に練習するようなことも、考えていきたいです」

―代表を強くするためにすべてを集約していくには、わかりやすい目標が必要ですね。

「起爆剤として一番いいのはW杯の日本開催だと思います。W杯の成功とは、ジャパンが勝つことです。そのためにやらなければいけないことが出てくる。現場の監督やコーチだけでなく、日本でラグビーに携わっている人全員が世界で勝つために本気になるということが、なにより大事なのだと思います」

―JWCのU20日本代表の戦いぶりを見ていると、得点力がない。日本ラグビーの抱える課題は、どのカテゴリーでも同じですね。

「私も日本代表時代、三監督の下でプレーしましたが、監督が代わるたびにすべてが変わる。日本の強さ、弱さ、どう戦うべきかは、以前からハッキリしている。それを子供から大人までみんながハッキリと認識しなければいけない。たとえば、薫田監督は、日本のディフェンスは『速く、低く』だと言う。ジョン・カーワンも同じことを言っています。これは強味にしていかなくてはいけない。ただし、日本のモールは強いと言われているけれど、オールブラックスにも通用するのかといえば分からない。このあたりをハッキリしなければいけない。私が思うに日本の選手は他国に比べて状況判断力が劣っている。これは、すぐに手をつけるべき問題です。ここ10年、日本の多くのチームが、シークエンスを取り入れた。グラウンドの場所によって予め何をするか決めて戦っています。自分で考える選手を作らなければ世界で勝つのは難しい。この10年で日本ラグビーが進歩したのはフィジカル面。BKでも大きな選手が増えてきた。いいWTBや突破役の選手はどんどん出てきている。しかし、ゲームを作れる選手は少ない。小さい頃からそういうトレーニングをしていないからです。たとえば、『このグレードは判断力重視』というような指針を協会として出していかなくてはいけない」

―高校の大会形式の見直しも必要でしょうね。

「日本の高校はトーナメントが多く、

岩渕健輔

「セコムラガッツ→日本協会ハイパフォーマンスマネージャー」

サクラのジャージーを着た。ケンブリッジでブルーの称号も得た。サラセンズ、USコロミエと、プロフェッショナルとして生きた。世界を舞台に戦ってきたケニー。今度は、日本ラグビーを世界に導く番である。5月中旬、日本協会が発表したプレスリリースに、ケニーが新しく就いたポストの説明が記してあった。「中長期的視野での日本ラグビー強化のため、日本代表を頂点とした一貫したコーチングプログラムならびに選手育成プログラムなどの構築を行い見つめる先は、これまで同様、世界。各カテゴリーの代表チームはもちろん、協会内の各委員会とも連携をとりながら、これまでにないコーチングプログラムを構築していく予定だ。」

文／村上晃一　写真／長尾亜紀

いわぶち・けんすけ
1975年12月30日生まれ、33歳／178㌢、79㌔／青学高→青学大
青学大2年時にジャパンに初選出される。大学卒業後、神戸製鋼に入社。'98年10月にケンブリッジ大に入学し、翌年12月、オックスフォード大とのヴァーシティーマッチに出場し、ブルーの称号を得る。'00年、サラセンズと契約。'01年、第3回セブンズW杯出場。'04年～'05年はサラセンズより派遣され、福岡サニックス所属（ストラテジー・コントローラー・コーチ兼任選手）。'06年にはフランスリーグのUSコロミエへ。'07年～'08年はセコムラガッツBKコーチ（選手兼任）。'08年からは7人制日本代表コーチも務めている。日本代表キャップ20（第4回W杯メンバー）

ターゲットは、いつも世界。